

二葉亭余談

内田魯庵

青空文庫

一 二葉亭との初対面

私が初めて二葉亭と面会したのは明治二十二年の秋の末であった。この憶^{おも}出^{いで}を語る前に順序として私自身の事を少しくいわねばならない。

これより先き二葉亭の噂^{うわさ}は巖^{いわ}本^{もと}撫^ぶ象^{しょう}から度々聞いていた。

巖^{しき}本は頻りに二葉亭の人物を讃歎して、「二葉亭は哲学者である、シカモ輪廓の大なる人物である、」と激称していた。『浮雲』は私の当時の愛読書の一つで、『あいびき』や『めぐりあい』をも感嘆して何度も反覆していたから是非一度は面会したいと思いな

がらも機会を得なかった。

その頃私が往来していた文壇の人はいくばくもなかった。紅葉
美妙以下硯友社諸氏の文品才藻には深く推服していたが、元来私
の志していたのは経済であつて、文学の如きは閑余の遊戯としか
思つていなかった。平たくいうと、当時は硯友社中は勿論、文学
革新を呼号した『小説神髓』の著者といえども今日のように芸術
を深く考えていなかった。ましてや私の如きただの応援隊、文壇
のドウスル連れんというようなものは最高文学に対する理解があるは
ずがなかった。面白ずくに三馬や京伝や其磧きせきや西鶴さいかくを偉人のよ
うに持上げて、内心ではこの輩が堂々たる国学または儒林の先
賢と肩ならを列べる資格があるとは少しも思つていなかった。渠かれらの

人物がどうのこうのというよりはドダイ小説や戯曲を尊重する気がしなかった。坪内逍遙や高田半峰の文学論を読んでも、議論としては感服するが小説その物を重く見る気にはなれなかった。

私が初めて甚^{じんしん}深の感動を与えられ、小説に対して敬^{けいけん}虔な信念を持つようになったのはドストエフスキーの『罪と罰』であつた。この『罪と罰』を読んだのは明治二十二年の夏、富士の裾野^{すその}の或る旅宿に逗^{とうりゆう}留していた時、行李^{こうり}に携えたこの一冊を再三再四反覆して初めて露西亜小説の偉大なるを驚嘆した。

私は詞藻の才が乏しかったから、初めから文人になれようともまたなろうとも思わなかった。が、小説雑著^{こども}は児供の時から好きでかなり広く涉獵していた。その頃は普通の貸本屋本は大抵読尽

して聖堂図書館の八文字屋本を専ら漁^{あさ}っていた。西洋の物も少しは読んでいた。それ故、文章を作らしたらカラ駄目で、とても硯友社の読者の靴^{くつ}の紐^{ひも}を結ぶにも足りなかったが、其礎以後の小説を一通り漁り尽した私は硯友社諸君の器用な文才には敬服しても造詣^{ぞうけい}の底は見え透いた気がして円朝の人情噺^{ばなし}以上に動かされなかった。古人の作や一知半解ながらも多少窺^{うかが}った外国小説（その頃ゾラやドウデも既に読んでいた）でも全幅を傾倒するほどの感に打たれるものには余り多く出会わなかったから、私の文学に対するその頃の直踏^{ねづみ}は余り高くはなかった。

然るに『罪と罰』を読んだ時、あたかも曠野^{こうや}に落雷に会うて眼眩^{くら}めき耳聾^しいたる如き、今までにかつて覚えなない甚深の感動を与

えられた。こういう厳肅な敬虔な感動はただ芸術だけでは決して与えられるものでないから、作者の包蔵する信念が直ちに私の肺腑の琴線を衝いたのであると信じて作者の偉大なる力を深く感得した。その時の私の心持は『罪と罰』を措いて直ちにドストエフスキーの偉大なる霊と相抱擁するような感に充たされた。

それ以来、私の小説に対する考は全く一変してしまった。それまでは文学を輕視し、内心「時間潰し」^{キルタイム}に過ぎない遊戲と思いがら面白半分の応援隊となっていたが、それ以来かくの如き態度は嚴肅な文学に対する冒瀆^{ぼうとく}であると思ひ、同時に私のような貧しい思想と稀薄^{きはく}な信念のものが遊戲的に文学を語るを空恐ろしく思つた。

同時に私は二葉亭を憶出した。巖本撫象が二葉亭は哲学者であるといったのを奇異な感じを以て聞いていたが、ドストエフスキーの如き偉大な作家を産んだ露国の文学に造詣する二葉亭は如何なる人であろうと揣摩しませずにはいられなかった。

これより先き、私はステップニヤツクの『アンダーグラウンド・ラシヤ』を読んで露国の民族性及び思想に興味を持ち、この富士の裾野に旅した時も行李の中へ携えて来たが、『罪与罰と』に感激すると同時にステップニヤツクを想い起し、かつ二葉亭をも憶い浮べた。

今考えると、ステップニヤツクと二葉亭とを結び付けるといふは奇妙であるが、その時は同型でなくとも何処どこかに遠い親類ぐら

いの共通点があるように思っていた。ステツプニヤツクの肖像や
 伝記はその時分まだ知らなかったが、精悍剛愎せいこんごうふくの氣象が満身
 に張切はりきつてゐる人物らしく推断して、二葉亭をもまた巖本からしば
 しば「哲学者である」と聞いていた故、哲学者風の重厚沈毅ちんきに加
 えて革命党風の精悍剛愎が眉宇びうに溢あふれている状じようぼう貌らしく考
 えていた。左とに右かく多くの二葉亭を知る人が会わない先きに風采閑
 雅な才子風の小説家型であると想像していたと反して、私は初め
 から爾そうは思つていなかった。

秋の末に帰京すると、留守中の来訪者の名刺の中に意外にも長
 谷川辰之助の名を発見してあたかも酸すを懷おもうて梅実を見る如くに
 歓喜し、その翌々日の夕方初めて二葉亭を猿樂町に訪問した。

丁度日が暮れて間もなくであつた。座敷の縁側を通り過ぎて陰気な重苦しい土蔵の中に案内されると、あたかも方ほう領がん無髯むぜんの巨漢が高い卓テーブル子の上から薄暗いランプを移して、今まで腰を掛けていたらしい黒塗の箱の上の蒲団ふとんを跳退はねけて代りに置く処だつた。

一応初対面の挨拶あいさつを済まして部屋の四周を見廻した。薄暗いランプの蔭に隠れて判然はつきり解らなかつたが、ランプを置いた小汚ない本箱の外には裝飾らしい裝飾は一つもなく、粗末な卓子に附属する椅子さえなくして、本箱らしい黒塗の剥はげた頃合ころあいの高さの箱が腰掛ともなりランプ台ともなるらしかつた。美妙齋や紅葉の書齋のゴタクサ書籍を積重ねた中に変へんてこ挺な画や翫おもちゃ弄物を列べたと反して、余りに簡単過ぎていた。

風采は私の想像と余りに違わなかった。沈毅な容貌に釣合う錆のある声で、極めて重々しく一語々々を腹の底から搾り出すように話した。口の先きで喋べる我々はその底力のある音声を聞くと、自分の饒舌が如何にも薄ッぺらで目方がないのを恥かしく思った。

何を咄したか忘れてしまったが、今でも頭脳に固く印しているのは、その時卓子の上に読半しの書籍が開いたまま置かれてあったのを何であると訊くと、二葉亭は極めて面羞げな顔をして、「誠にお恥かしい事で、今時分漸と『オリジン・オブ・スペース』を読んでるような始末で、あなたの方英書をお読みになる方はこういう名著を早くから御覧になる事が出来るが、露西亞には文学書の

外何にもないので三歳子も知つてゐる名著に今時分漸とこさと嚙り付いているような次第で、「とさも恥入るという容子だつた。それから三十年経つた今でさえ尚だダアウインを覗かない私は今でも憶出すと面目ないが、なお更その時は消え入りたいような氣持がした。

その時私より三、四十分も遅れて大学の古典漢文科の出身だというYが来問した。この人の口から日本将来の文章という問題が提起された。その時の二葉亭の答が、今では発揮と覚えていないが、何でもこういう意味であつた。「一体文章の目的は何である乎。真理を發揮するのが文章の目的乎、人生を説明するのが文章の目的乎、この問題が決しない中は将来の文章を論ずる事は出来

ない。この問題が定まれば乃ちその目的を達するに最も近い最も適する文章が自ずから将来の文体となるのである——」という趣旨であつた。

この答には私は意外の感に打たれた。当時私はスペンサーの文體論を初め二、三の著名な文章説を読んでいたが、こういう意味の文章論をいわゆる小説家の口から聴こうとは夢にも思つていなかった。問題の提出者たる古典科出身のYは不可解な顔をして何ともいわなかつた。

ドストエフスキーを読んで落雷に出会つたような心地のした私は更に二葉亭に接して千丈の飛瀑ひばくに打たれたような感があつた。それまで実は小説その他のいわゆる軟文学をただの一時の遊戲に

過ぎないばかり思っていたのだが、おぼ臆ろげ気ながらも人生と交渉する厳肅な森嚴な意味を文学に認めるようになったのはこの初対面よつに由て得た二葉亭の賜物であつて、誰に会った時よりも二葉亭との初対面が最も深い印象を残した。

二 津の守の女の写真屋

たしか明治二十四年頃であつた、二葉亭はよつや四谷の津かみの守の女の写真屋の二階に下宿した事があつた。写真屋きというところが利きいているが、宿場外はずれの商人宿めいたガサガサした下等な家で、二葉亭の外にも下宿人があつたらしく、写真屋が本業であつた乎、下

宿屋が本業であつた乎、どちらとも解らない家であつた。

秋の一夜偶然尋ねると、珍らしく微醺びくんを帯びた上機嫌であつて、
 どのような話のキツカケからであつたか平生いっしょの話題とは全まるで見当違
 いの写真屋論をした。写真屋の資本の要いらない話、資本も労力も
 余り要らない割合には樂もつに儲けられる話、技術が極めて簡単だか
 ら女にでも、少し器用なら容易に覚えられる話、写真屋も商売と
 なると技術よりは客扱いが肝腎だから、女の方がかえつて愛あいきよ
 嬌うがあつて客受けがイイという話、ここの写真屋の女主人と
 いうは後家ごけさんだそうだが相應に儲かるという咄はなし、そんな話を重
 ねた挙句あげくが、「官吏も面白くないから、女の写真屋でも初めて後
 見をやるうかと思う、」と取つても附かない事を言出した。

「女の写真屋は面白い。が、あるかね、技師になる適當の女が？」
という、さもこそといわぬばかりに、「ある、ある、打って付
けのお誂え向きあつちという女がある。技術はこれから教育しこまにやなら
んが、技術は何でもない。それよりは客扱い——髯ひげの生えた七しちむ
難つかしい軍人でも、訳の解らない田舎の婆ばあさんでも、一視同仁
に手の中に丸め込む客扱いと、商売上の繰くり廻まわしをグングン押切
つて奮闘する勝気かちきが必要なんだが、幸い人生の荒波の底を潜くぐつて
活いきた学問をして来た女がある」と、それから今の女の教育が何
の役にも立たない事、今の女の学問が紅白粉べにおしろいのお化粧同様であ
る事、真の人間を作るには学問教育よりは人生の實際の塩辛い経
験が大切である事、茶屋女とか芸者とかいうような下層に沈ちん淪りん

した女が案外な道德的感情に富んでいて、率いざという場合ふとこ懐ろ育ち
 のお嬢さんや女学生上りの奥さんよりも遥はるかに役に立つ事を諄じゆんじ
 々ゆんと説き、「女丈夫じょじょうふというほどでなくとも、こういう人生の
 荒浪を潜り抜けて来た女でなくては男の真の片腕とするには足り
 ない」と、何処の女であるか知らぬが近頃際会したという或る女
 の身の上咄をして、「境涯が境涯だから人にも賤いやしめられ侮られ
 ているが、世間を呑込のみこんで少しも疑懼ぎくしない氣象と、人情の機微
 に通ずる貴い同情と——女学校の教育では決して得られないもの
 を持つてる。こういう女に多少の学問と独立出来る職業を与えた
 ら、虚榮に憧あこがれる今の女学校出の奥さんよりは遥まさに勝った立派
 な女が出来る、」と意気込んで咄した。

この結論に達するまでの理路は極めて井然せいぜんとしていたが、ツマリ泥水稼業どろみずかぎようのものが素人しろうとよりは勝っているというのが結論であるから、女の看方みかたについて根本の立場を異にする私には一々承服する事が出来なかつた。が、議論はともあれ、初めは微醉ほろよい気味ぎみであつたのが段々真剣になつて低い沈んだ調子でポツリポツリと話すのが淋しい秋の寂寞せきばくに浸しみ入るような気がして、内心承服出来ない言葉の一つ一つをシンミリと味あじわわせられた。

「その女をどうしようツてのだい？」

「どうする意つももないが、境遇のため眠つてるヒューマニチーの眼を覚さまさせるため、真面目まじめな職業なり学問なりを与えてやりたいのだ」と、女の咄から発して人生論となり、コントのポジティブ

イズムに説き及ぼし、蜘蛛くもが巣を作るように段々と大きな網を広げて、終ついにはヒューマニチーの大哲学となつた。女の写真屋を初めるというのも、一人の女に職業を与えるためというよりは、救世の大本願を抱く大聖が辻説法の道場を建てると同じような重大な意味があつた。

が、その女は何者である乎、現在何処にいる乎と、切込んで質問すると、「唯ほんの通り一遍の知り合いだからマダ発表する時期にならない、」とばかりで明言しなかつた。が、「一見して氣象に惚ほれ込んだ、共に人生を語るに足ると信じたのだ、」と深く思込んだけしき氣色だつた。

折々——というよりは煩うるさく、多分下宿屋の女中であつたらう、

十二階下とでもいいそうな真^{まつ}白^{しろ}に塗り立てた女が現われて来て、茶を汲^くんだり炭をついだりしながら媚^{なまめ}かしい容^{よう}子^すをして、何か調^か戲^らわれて見たそうにモジモジしていた。沈毅な二葉亭の重々しい音声と、こうした真剣な話に伴うシンミリした気分とに極めて不調和な下^げ司^すな女の軽^うい^わち^{やう}し調^{てう}子^しが虫唾^{むしず}が走るほど堪^{たま}らなく不愉快^{ふげき}だった。

十二時近くこの白粉の女が来て、「最^もう臥^ふせりますからお床^{とこ}を伸^のべましょうか、」といった。遅いとは思^{おも}ったが、初めて時間に気が付いて急いで座^ざを起^たとうとすると、尚^まだ余談が尽きないから泊^とって行^いけといいつつ、「お客様の床も持^もって来てくれ」と吩咐^{いふづ}けた。

二葉亭は談話^{はなし}が上手^{じょうず}でもあつたしかつ好きでもあつた。が、この晩ぐらい興奮した事は珍^{めづ}らしかつた。更^ふければ更けるほど益々身が入つて、今ではその咄の大部分を忘れてしまつたが、平日の冷やかな科学的批判とは全く違つたシンミリした人情の機微に入つた話をした。二時となり三時となつても話は綿々として尽きないで、余^{あんな}り遅くなるからと臥床^{ねどこ}に横になつて、蒲団の中に潜^{もぐ}ずり込んでしまつてもなおこのまま眠^ねてしまうのが惜しうであつた。「寝よう乎」と寝返りしては復^{また}た暫らくして、「どうも寝られない」と向き直つてポツリポツリと話し出し、とうとう鶏^{とり}の音が聞えて雨戸^{あまど}の隙^{すき}が白んで来たまでも語り続けた。明るくなつたので最^もう眠^ねるでもない^ねと床を離れて「それじゃア帰ろう」という

と、まだ話が仕足りなさそうな容子で、「どうせ最う眠^ねられんから運動がてら其^{そこ}辺まで送って行こう」とムツクリ起上つて、そこに顔を洗つてから一緒に家を出で、津の守から坂町を下り、士官学校の前を市谷^{いちがやみつけ}見附まで、シラシラ明けのマダ大抵な家の雨戸が下りてる中をブラブラと送つて来た。八幡の鳥居^{やうべ}の傍^{そば}まで来て別れようとした時、何と思つた乎、「イヤ、昨^{ゆう}宵は馬鹿ツ話をした、女の写真屋の話は最う取消した、」とニヤリと笑いつつ、「飛んでもないお饒^{しゃべり}舌をしてしまった!」

*

その晩の話^を綜合して想像すると、境遇のため泥水稼業に墮^おちた可哀相な氣の毒な女があつて、これを泥の中から拾い上げて、中年からでも一人前になれる自活の道を与える意^{つも}り、色々考えた結果がココの女の写真屋の内弟子^{うちでし}に住込ませて仕込んでもらつてゐる^{らし}かつた。が、^そんな女が果してあつたかドウかは知^しらない。この晩度々見えた白粉の女がそうらしくも思われたが、マサカに二葉亭が「一見して氣象に惚れ込んだ」というほど思い込んだ女があんな下司^{げす}な引摺^{ひきずり}だとは信じられなかつた。女の写真屋の話はそれ切^{ぎり}で、その後コツチから水を向けても「アレは空談サ」とばかり一笑に附してしまつたから今^{もつ}以て不可解である。二葉亭は多情多恨で交友間に聞え、かなり艶^{えん}聞^{ぶん}にも富んでいたらしいが、

私は二葉亭に限らず誰とでも酒と女の話には余り立入らんから、この方面における二葉亭の消息については余り多く知らない。ただこの一夜を語り徹^あかした時の二葉亭の緊張した相貌や言語だけが今だに耳目の底に残ってる。

三 食道楽と無頓着

二葉亭には道楽というものがなかった。が、もし強^{しい}て求めたら食道楽であつたろう。無論食通ではなかったが、始終^{しじゅう}かなり^{やか}厭^{ぜいたく}ましい贅^{ぜいたく}沢^{たく}をいつていた。かつ頗^{すこぶ}る健啖家であつた。

私が猿楽町に下宿していた頃は、直ぐ近所だったので互^{ひんぱ}に頻

繁んに往来し、二葉亭はいつでも夕方から来ては十二時近くまで咄はなした。その頃私は毎晩夜更よふかしをして二時三時まで仕事をするので十二時近くなると釜揚げかまあげうどんをを取るのが例となっていた。下宿屋の女中を呼んで、願あこをしゃくツて「宜いいかい」というと直ぐに合点したもんだ。二葉亭も来る度毎たんびに必ずこの常例の釜揚げを賞翫たしたが、一つでは足りないで二つまでペロリと平らげる事が度たび々であつた。

二葉亭の恩師古川常一郎も交友間に聞えた食道楽であつた。かつて或る暴風雨の日に俄にわかに鰻なぐさが喰くいたくなつて、その頃名代の金か杉なすぎの松まつ金きんへ風雨を犯して綱曳つなひき跡押あとおし付きの俵くるまで駈かけ付けた。ところが生憎あいにく不漁しけで休みの札が掛けていたので、「折角暴風雨あらし

の中を遙々車を飛ばして来たのに残念だ」と、はるばる 悄氣返しよげかえつて頻しきりに愚痴つたので、帳場の主人が気の毒がつて、「暫らくお待ち下さいまし」と奥へ相談に行き、「折角ですから一尾いっぴきでお宜よろしければ……」といった。「一尾結構、」と古川先生大いに満足して一尾の鰻を十倍うま旨く舌打して賞翫したという逸事がある。恩師の食道楽に感化された乎、は 将てん天稟びんの食癖であつた乎、二葉亭は食通ではなかつたが食物くいものの穿議せんぎがかなり嚴やかましかつた。或る時一緒に散策して某々知人を番町に尋ねた歸るさに靖国神社近くで夕景となつたから、何処かで夕飯を喰おうという、この近辺には喰うような家がないといつて容易に承知しない。それから馬場を通り抜け、九段を下りて神保町じんぼうちょうをブラブラし、時刻は最う

八時を過ぎて腹の虫がグウグウ鳴って来たが、なかなかそこらの牛肉屋へ入ろうとしない。とうとう明神下の神田川かんだがわまで草臥くたびれ足を引摺って来たのが九時過ぎで、二階へ通って例の通りに待たされるのが常より一層待遠しかったが「こうして腹を空すかして置くのが美食法の秘訣だ、」と、やがて持って来た大串おおぐしの脂あぶらツこい奴をペロペロと五皿いつさら平らげた。

私は食物くいものには割合に無頓着むとんちやくであつて、何処でも腹が空けばその近所の飲食店で間に合あわして置く方であるが、二葉亭はなかなか爾そう行かなかつた。いつでも散歩すると意見の衝突きつを来きたすは必ず食事であつて、その度毎たんびに「食物くいものでは話せない」といった。電車の便利のない時分、向島むこうしまへ遊びに行つて、夕飯を喰くひに

わざわざ日本橋まで俵を飛ばして行くという難かし屋であつた。

その上に頗る多食家であつて、親しい遠慮のない友達が来ると水菓子だの餅菓子だのと三種も四種も山盛りに積んだのを列べて、お客はそちのけで片端からムシヤムシヤと間断なしに頬張りながら話をした。殊に蜜柑と樽柿が好物で、見る間に皮や種子を山のように積上げ、「死骸を見るとさも沢山喰つたらしくて体裁が宜くない、」などと云い云い普通の人が一つ二つを喰う間に五つも六つもペロペロと平らげた。

が、贅沢は食物だけであつて、衣服や道具には極めて無頓着であつた。私が初めて訪問した時にダーウインの『種原論』が載つていた粗末な卓子がその後脚を切られて、普通の机となつて露

西亜へ行くまで使用されていた。^{すずり}硯も書生時代から持古るしたお粗末のものなら、墨も筆も少しも扱ばなかった。机の上は勿論、^{とこ}床の間にさえ原稿紙や手紙^{がら}殻や雑誌や書籍がダラシなくゴタクサ積重ねられ、装飾らしい装飾は一物もなかった。一と口にいうと、^{いなか}地方からポツと出の山出し書生の下宿住い^{ずま}同様であつて、原稿紙からインキの色までを気にする文人らしい趣味や気分を少しも持たなかった。文房粧飾というようなそんな問題には極めて無頓着であつて、或る時そんな咄が出た時、「百万両も儲かったら眼の玉の飛出るような立派な書斎を作るサ、」と事もなげに^{からから}呵々々と笑つた。

衣服にもやはり無頓着であつた。^{たばこ}煙草が好きで、いつでも^{きせる}煙管

の羅^ら宇^おの破^われたのに紙を巻いてジウジウ吸^すっていたが、いよいよ
烟^や脂^にが溜^{たま}つて吸^す口^{くち}まで滲^{にじ}み出して来ると、締^しめてるメレンスの
帯^{おび}を引裂^ひいて掃^{そう}除^じするのが癖^{くせ}で、段々引裂^ひかれて半分近くまでも
斜^はす^すに削^{けず}りかけ掛^{かけ}のように総^{ふさ}が下^さつてる帯を平氣で締^しめていた。実業
熱^{ねつ}が長^{なが}じて待^{まち}合^あ入^いりを初めてから俄^なかにめかし出^でしたが、或^{ある}時
羽^は織^おを新調^{しんてう}したから見てくれと斜^な子^{なこ}の紋^{もん}付^けを出^でして見^みせた。かな
り目^め方^{かた}のある斜^せ子^こであつたが、絵^え甲^が斐^い機^きの胴^{どう}裏^{うら}が如何^{いか}にも貧^{ひん}弱^{じやく}
で見^み窄^{みすぼ}らしかつたので、「この胴裏^{どううら}じゃ表^{おもて}が泣^なく、最^も少^{すこ}し氣^き張^ばれ
ば宜^よかつた」というと「何^な故^げ、昔^{むかし}から羽織^{はおり}の裏^{うら}は甲斐^{かい}機^きに定^{きま}つて
るじゃないか、」と澄^すました顔^{かほ}をしていた。それから、「この頃^{ふたこ}
は二^{ふた}子^この裏^{うら}にさえ甲斐^{かい}機^きを付^けける。斜^せ子^この羽織^{はおり}の胴裏^{どううら}が絵^え甲^が斐^い機^き

じやア郡役所の書記か小学校の先生染みていて、待合入りをする旦那だんなの估券こけんに触るさわ。思切つて緞子どんすか繻珍しゅちんに換え給え、」（その頃羽二重はぶたえはマダ流行はやらなかつた。）という、と、「緞子か繻珍？——そりやア華族様の事ことツた、」と頗る不平な顔をして取合わなかつた。丁度同じ頃、その頃流行はやつた黒無地のセルに三紋みつもんを平縫ひらぬいにした単羽織ひとえばおりを能く着ていたので、「大分渋いものを拵こしらえたネ、」と褒めると、「この位なものは知つてゐるサ、」と頗る得々としていた。

四 俗曲趣味

二葉亭は江戸ツ子肌であつた。あの厳いかめしい顔に似合わず、（野や暮ぼを任じていたが、）粹いきとか渋いとかいう好みにも興味を持つていて相応に遊ゆう蕩とうもした。そういう方面の交際を全く嫌つた私の生野暮きやぼを晒さらつて、「遊蕩も少しはして見ないとホントウの人生が解よらんものだ、一つ何処どっかイイ処へ案内しようじゃないか、」と能く云い云いした。

二葉亭のお父さんは尾州藩だったが、長い間の江戸詰づめで江戸の御家人ごけにん化していた。お母さんも同じ藩の武家生れだったが、やはり江戸で育つて江戸風に仕込まれた。両親共に三味線が好きで、殊ことにお母さんは常磐津ときわづが上手で、若い時には晚酌ばんしやくの微醉ほろえいにお母さんの絃いとでお父さんが一とくさり語るといふような家庭だつたそ

うだ（二葉亭の直話）。江戸の御家人にはこういう芸欲や道楽があつて、大抵な無器用なものでも清きよ元もとや常磐津の一とくさり位は唄うたつたもんだ。二葉亭のお父さんも晩酌の膳ぜんに端唄はうたの一つも唄うという嗜たしなみがあつたのだから、若い時分には相応にこの方面の苦勞をしようと思う。この享樂氣分の血は二葉亭にもまた流れていた。

その頃の書生は今の青年がオペラやキネマへ入いり浸びると同様に盛んに寄席よせへ通かよつたもので、寄席芸人の物真似ものまねは書生の課外レスンの一つであつた。二葉亭もまた無二の寄席党で、語学校の寄宿舎にいた頃は神保町の川竹（その頃は川竹とはいわなかつたが）の常連であつた。新内しんないの若辰わかたつが大の鼯負ひいきで、若辰の出る席へ

は千里を遠しとせず通い、寄宿舎の淋しい徒然には錆のある声
 で若辰の節を転がして喝采を買ったもんだそうだ。二葉亭の若
 辰の身振声色と矢崎嵯峨の屋の談志の物真似テケレッツのペア
 は寄宿舎の評判であつた。嵯峨の屋は今六十何歳の老年でマダ
 健在であるが、あのムツツリした朴々たる君子がテケレッツの
 ペアでステテコ気分を盛んに寄宿舎に溢らしたもんだ。語学校の
 教授時代、学生を引率して修学旅行をした旅店の或る一夜、監督
 の各教師が学生に強要されて隠し芸を迫られた時、二葉亭は手
 拭を姉さん被りにして箒を抱え、俯向き加減に白い眼を剥きつ
 つ、「処、青山百人町の、鈴木主水というお侍さんは……」と
 瞽女の坊の身振りをして、平生小六かしい顔をしている先生の意

外な珍芸にアツと感服さしたというのはやはり昔し取った杵柄きねづかの若辰の物真似であつたろう。「謹厳」が洋服を着たような満面苦渋の長谷川辰之助先生がこういう意表な隠し芸を持っていようとは学生の誰もが想像しなかつたから呆氣あつけに取られたのも無理はない。が、「謹厳」のお化ばけのような先生は尾州人という条、江戸の藩邸で江戸の御家人化した父の子と生れた江戸ツ子であつたのだ。

東片町に住すまつた頃、近所に常磐津を上手に語る家があつた。二葉亭は毎晩その刻限を覗ねらつては垣根越しに聞きに行つた。艶つやツぽい節廻ふしまわしの身に沁しみ入るようなのに聞惚ききほれて、為ため永ながの中ちゆうほ本ほんに出て来あだそうちゆうどしまな仇な中年増を想像しては能く噂うわさをしていた

が、或る時尋ねると、「時にアノ常磐津の本尊をととう突留め
たところが、アンマリ見当外れでビックリした。仇な年増どころ
か皺だらけのイイ婆アさんサ。あの乾枯びたシャモの頸のような
咽喉からドウしてアンナ艶ッぽい声が出るか、声ばかり聞
いてる身体が融けるようだが、顔を見るとウンザリする、」とい
った。顔を見るとウンザリしてもその声に陶醉した気持は忘れ
られないと見えて、その後も時々垣根の外へ聞きに行ったらし
かった。『平凡』の一節に「新内でも清元でも上手の歌うの
を聞いてると、何だかこう国民の精粹というようなものが髣髴
としてイキな声や微妙の節廻しの上に現れて、わが心の底に
潜む何かに触れて何かが想い出されて何ともいえぬ懐かしい
心持になる。私はこれを

日本国民が二千年来この生を味あじうて得た所のものが間接の思想の形式に由らず直ちに人の肉声に乗って無形のままで人心に來り迫るのだ」とあるは二葉亭のこの間の芸に魅入られた心境を説明しておる。だが、こういうと馬鹿に難かしく面倒臭くなるが、畢竟は二葉亭の頭の隅のドコかに江戸ッ子特有の廃はい頽たい氣分が潜在して、同じデカダンの産物であるこういう俗曲に共鳴したのである。これを日本国民が二千年来この生を味うて得た所のものと国民性に結びつけて難かしく理窟をつける處に二葉亭の国士的形氣かたぎが見える。

だが、同じ日本の俗曲でも、河東節かとうぶしの会へ一緒に聴きに行つた事があるが、河東節には閉口したらしく、なるほど親類だけに

二段聴きだ、アンナものは三味線のようらん揺籃時代の産物だといって根っから感服しなかった。河東節の批評はほぼ同感であつたが、私が日本の俗曲では何といつても長なが唄であるうたと長唄礼讃を主張すると、長唄は奥さん向きの家庭音曲であると排斥して、何といつても隅田河原の霞を罩めた春の夕暮すみだがわらかすみこというような日本民族独特の淡い哀愁を誘つて日本の民衆の腸はらわたしみこに染込ませるものは常磐津か新内の外にはないと反対した。この俗曲論は日本の民族性の理解を基礎として立てた説であるが、一つは両親が常磐津が好きで、こども児供の時から聴き馴なれていたのと、最一つは下層階級に味方するもちまえ持前の平民的傾向から自然にこれらの平民的音曲に対する同感が深かつたのであろう。

二葉亭は洋楽には一向趣味がなかった。折に触れて洋楽に対する私の興味を語ると、「洋楽はトツピキピのピだ」と一言に蔑^{けな}しつけた。「洋楽にもかなりシンミリしたものがあゝる、ヘイズンかシューベルトのセレナードでも聴いて見給え、かなりシンミリした情調が味える、かつシンミリしたものばかりが美^{うつく}しい音楽ではないから……」と二、三度音楽会へ誘つて見たが、「洋楽は真^ま平御免だ！」といつて応^{こた}じなかつた。桜井女学校の講師をしていた時分、卒業式に招かれて臨席したが、中途にピアノの演奏が初まつたので不快になつて即時に退席したと日記に書いてある。晩年にはそれほど偏^{かた}意^い地^じではなかつたが、左^{ひだり}に右^{みぎ}く洋楽は嫌いであつた。この頃の洋楽流行時代に居合^あわして、いわゆる鋸^{のこぎり}の目を

立てるようなヴァイオリンやシャモの絞しめ殺ころされるようなコロラ
 チウラ・ソプラノでもそこらこらで聴かされ、加おまけ之にラジオで
 放送までされたら二葉亭はとても助かるまい。苦にがむしつぶ虫潰しても居
 堪たまらないだろう。

五 犬と猫

俗曲よりも好きだったのは犬と猫であつた。俗曲と家畜を一緒
 にするのは変であるが二葉亭の趣味問題としていうと、俗曲の方
 には好き嫌いや註文があつて、誰が何を語つても感服したのでは
 なかったが、家畜の方は少しも忤えり好みがなく、どんな犬でも猫

でも平等に愛していた。『浮雲』時代の日記に、「常に馴れたる近隣の飼犬のこの頃は余を見ても尾を振りもせず跟をも追はず、その傍を打通れば鼻つらをさしのべて臭ひを嗅ぐのみにて余所を向く、この頃はさかなを食する事稀まれなれば残りを食はまする事もしばしばあらざればと心の中に思ひたり、ただこう思ひたるばかりにてさして心に留めざりしかど何となく快からず」とあるは犬に与える残ざんこうにだも不自由をして懐なついた犬に背そむかれたのを心淋しく感じたのであろう。

『平凡』の中の犬の一節は二葉亭の作中屈指の評判物であるが、あれは仲猿楽町時代の飼犬の実話を書いたものである。あの行衛ゆくえ知れずになった犬というはポインターとブルテリアの醜い処を搗つ

交きぜたような下等雜種であつて、『平凡』にある通りに誰の目にも余り見つとも好よくない厭いやな犬であつた。『平凡』では棄てられてクンクン鳴いていた犬の子を拾つて育て上げたように書いてあるが、事實は役所の帰かえりみち途つに隨ついて來た野良犬のらいぬをズルズルベツタりに飼犬としてしまったので、『平凡』にある通りな狐のような厭な犬であつたから、家族は誰いも嫌いやがつて碌ろくろく々かま関ふいびんつけなかつた。が、犬ぶりに由て愛憎を二つにしない二葉亭は不便ふびんがつて面倒を見てやつたから、犬の方でも懷こいて、二葉亭が出る度毎たんびに跟を追つて困るので、役所へ行く時は格子こうしの中に閉じ込めて何処へも出られないようにして置いた。その留守中は淋しそうにションボリして時々悲しい低い声を出して鳴いていたが、二葉亭が帰

って来て格子を開けると嬉し^{うれ}そうに飛付き、^{かまち}框に腰を掛けて靴を
 脱^{はき}ごうとする膝へ飛上つて、前脚を肩へ掛けてはベロベロと頬^{ほっ}ぺ
 たを舐^なめた。「こらこら、そんな所^{まね}為をする勿^な」と二葉亭は柔^{やさ}し
 く制しながらも平気で舐めさしていた。時に由ると、嬉しくて堪
 らぬように踵^{あと}から泥^{どろ}足^{あし}のまま座敷まで追掛けて来てジャレ付い
 た。ジャレ付くのが可愛いような犬ではなかったが、二葉亭はホ
 クホクしながら、「こらこら、畳の上が泥になる、」と細い眼を
 して叱^{しか}りつけ、庭先きへ追出しては麵^{パン}麴^{もち}を投げてやった。これが
 一日の中の何^{たの}よりの楽^{たの}しみであつた。『平凡』に「……ポチが私に
 対^{むか}うと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか?…
 …どっちだかそれは解らんが、とにかく相互の熱情熱愛に人畜の

差別を撥無^{はつむ}して、渾然^{こんぜん}として一如となる、」とあるはこの瞬間の心持をいったもんだ。

この犬が或る日、二葉亭が出勤した留守中、お客が来て格子を排^あけた途端に飛出し、何処へか逃げてしまつてそれ切り帰らなかつた。丁度一週間ほど訪^{おも}いも訪われもしないで或る夕方偶^ふと尋ねると、いつでも定^{きま}つて飛付く犬がいないので、どうした犬はと訊^きくと、潮垂^{しおた}れ返つた元氣のない声で、「逃げたのか、取られたのか、いなくなつてしまつた」と、見えなくなつた顛末^{てんまつ}を語つて吻^{ほつ}と嘆息^{ためいき}を吐^ついた。「まるきり踪跡^{ゆくえ}が解らんのかい？」と重ねて訊くと、それ以来毎日役所から帰ると処々方々を捜しに歩くが皆目^{かいもく}解らない、「多分最う殺されてしまつたろう」と悄^{しお}れ返つ

ていた。「昨日きのうは酒屋の御用が来て、こちらさまのよに善く似た犬
 の首玉に児供が縄を縛り付けて引摺ひきずつて行くのを壱岐いきど殿坂で見掛
 けたといったから、直ぐ飛んでつて其処そこら中を訊きいて見たが、皆かい
 くれ解らなかつた。児供に虐め殺いじされた乎、犬殺しの手に掛つた
 か、どの道モウいないものと断念あきらめにやならない」と、自分の児
 供を喪なくした時でもこれほど落胆すまいと思うほどに弱り込んで
 いた。家庭の不幸でもあるなら悔みの言葉のいいようもあるが、
 犬では何と言つて慰めて宜いいか見当が付かないので、「犬なんて
 ものは何処どっかへ行つてしまつたと思うと、飛んでもない時分に戻
 つて来るもんだ。今に必きつと歸つて来るよ、」といつて見た。が、
 二葉亭は「イヤ、最あきらう断念めた！」と黙り込んでしまつたので、

この上最早言葉の接穂つぎほがなかった。

その当座は犬の事ばかりに屈托して、得意の人生論や下層研究も余り口に出なかった。あたかも私の友人の家で純粹セッター種の仔こが生れたので、或る時セッター種の深い長い艶つやつや々した天鷲ビロ絨ードよりも美しい毛並けなみと、性質が伶俐りこうで敏捷すばしこく、勇氣に富みながら平生は沈着おちついて鷹揚おうようである咄はなしをして、一匹仔犬を世話をしようかという、苦々しい顔をして、「イヤ、貰もらう気はしない、先妻が死んで日柄ひがらが経たない中に、どんな美人があるからッて後妻を貰う気になれるかい、」と喪くなつた醜い犬を追懷そくそして慫々くくの情に堪えないようだった。

犬よりも最う一倍酷愛していたのは猫であつた。皆川町時代か

ら飯田町、東片町の家に入出したものは誰でも知ってる、白いムクムクと肥^{ふと}った大きな牝猫^{めねこ}が、いつでも二葉亭の膝^{ひざ}の廻りを離れなかつたものだ。東片町時代には大分老耄^{ろうもう}して居^い睡^{ねむり}ばかりしていたが、この婆さん猫が時々二葉亭の膝へ這^{はい}上^{あが}つて甘^{あま}垂^{まつた}れ声^{こゑ}をして倦怠^{けんたい}そうに戯^{じゃ}れていた。人間なら好^いい齡^{とし}をした梅干^{うめぼし}婆^{ばあ}さんが十五、六の小娘^{こむすめ}の嬌態^{しなな}を作つて甘^{あま}つ垂^{まつた}れるようなもんだから、小※^{こいや}らしくて撲^はり倒してやりたい処だが、猫だからそれほど妙にも見えないで、二葉亭はお祖父^{じい}さんが孫を可愛がるようにホクホクして甘やかしていた。

この猫も本^もとは皆川町時代に何処^{まぐ}からか紛れ込んで来た迷い猫であつて、毛並^もから面付^{つらつき}までが余り宜^よくなかつた。が、二葉亭

は、「誰も褒めてくれ手がなくても、大事な可愛い娘だ、」と、猫を抱かかえて頬摺りしながら能く言つたもんだ。「人間の標準から見て、猫の容きりよう貌ようが好いの悪いのというは間違つてる、この猫だつて誰も褒めてくれ手がなくても猫同士が見たら案外な美人であるかも知れない、その証拠には交さ孌かりの時には牡猫が多おおぜい勢張はりに来る、」と。

かつ曰く、「仮に容きりよう貌ようが悪いにしても、容貌の好よしあし悪いで好き嫌いいをするのは真まに愛する所以ゆゑんではない。自分の娘が醜みにくいからといって親の情愛に変わりがないと同様に、猫にだつてやはり同じ人情がなければならぬはずだ。犬や猫の容貌ようめいが好いの悪いのといつて好いいたり嫌いつたりするは人間として実に恥かしい事だ、」と。

二葉亭の家では主人の次には猫が大切にされた。主人の留守にそそう猫に粗糲があつては大変だといつて、家うちじゆう中がどれほど猫を荷にやつかい厄介にして心配したか知れない。出入でいりの八百屋やおやの女房が飛んで来て、「大変でござります、唯今こちらさまのお猫さんが横町の犬に追われて向うの路次ろじに逃込みました、」と目の色変えて註進に及んだという珍談もあつた。

さかな

をかうにも主人の次には猫の分を取つた。残あまりを当てがうような事は決してなかつた。時々は「猫になりたい」という影かげぐち口もあつた。下世話げせわに、犬は貰われる時お子様方はお幾たりと尋ねるが猫は孩児がきは何匹だきと訊くという通りに、猫は犬と違つて児供いじに弄うづられるのを煩うるさがるものだが、二葉亭の家では猫は主人の寵ち

ようこう

幸であつて児供が翫弄おもちゃにするのを許さなかつた。児供の方

でも父の秘蔵を吞込んで、先年死んだ長男の玄太郎が五ツ六ツのいたずらざか悪戯盛りにも「あれは父ちゃんのおにやん子」といつて指一本も決して触れなかつた。

この猫は主人の寵愛に馴れて頗る行儀が悪るかつた。客が来て食物くいものが出ると、必ず何処からかヌウツと現われ、ノソノソ食物そばの傍へ行つて臭いを嗅ぐか。世間の猫はコソコソ忍び足で近づいては、油断を見済まして引攪ひっさらうものだが、二葉亭の猫は叱られた事がないから恐いこわという事を知らない。鷹揚にノソノソやつて来て、自分の好きな塩煎餅しおせんべいか搔餅かきもちでもあろうもんなら、宛さもこの家やのものは竈かまどの下かまどの灰までが俺おれの物だというような顔をして、

平気で菓子鉢に顔を突込んでほりほりと喰べ初める。すると二
 葉亭は眼を細くして、「これこれ、復たまたそんな意地汚いじきたなをする」
 と静かに膝へ抱取だきとつて掌上てのひらへ菓子を取つて喰わせながら、「放
 任教育だから行儀が悪くて困る、」と猫の頭を撫なで撫で「が、本
 来猫に行儀を仕込むツてのが間違つてゐる、人間の道德で猫を縛ろ
 うとするのは人間の我儘わがままで、猫に取つては迷惑千万な咄だ、」
 といった。けれどもお膳が出てから、生腥なまぐさい臭いにいよいよ鼻
 をムクムクさして、お客のお膳であろうと一向お関いなしに顔を
 突出つきだし、傍若無人にお先きへ失敬しようとする時は、いくら放任
 教育でも有繫さすがにお客の肴さかなを掠奪りやくだつするを打棄うちちやつて置けないか
 ら、そういう時は自分の膝元へ引寄せてお腕わんの蓋ふたなり小皿こざらなりに

肴を取分けて陪食させた。が、この腕白猫めは頗る健啖家で、
少とやそつとのお裾分では満足しなかった。刺身の一と皿位は
独り占めにベロリと平らげてなお飽足らずに、首を伸ばして主人
が箸に挿んで口まで持つて行こうとするのをやにわに横取りをす
る。すると二葉亭は眼を細くして、「ドウモ敏捷こい奴だ！」と
莞爾々々しながら悦に入つたもんだ。

二葉亭の猫におけるや、丁度若い母親が初めて産んだ子を甘やかすように、始終懷ろに入れたり肩へ載せたり、夜は抱いて寝て、
チヨツカイでも出せば溶けるような顔をして頬摺したり接吻
したりした。猫めの方でも大甘垂れに甘垂れて舌を出してはベロ
ベロと二葉亭の顔を舐めた。「接吻だけは止せというが、こうし

ずにはいられない」と状貌魁偉かいゐと形容しそうな相好そうこうを壊くずして、
 頤あごの下に猫を抱かかえ込んで小娘のように嬉しがって舐めたり撫さすつ
 たりした。

飯田町にいた時分、或る日曜日の朝十時頃に尋ねると、今起き
 たばかりだといって眠そうな顔をしていた。なんぼ日曜日でも少ち
 と寝坊が過ぎるというと、「昨宵ゆうべは猫のお産で到底寝られなかつ
 た、」といった。段々訊くと、予てから猫の産月うみづきが近づいたの
 で、書斎の戸棚とだなに行李こうりを準備よういし、小さい座蒲団を敷いて産所に充あ
 てていたところ、昨夜ゆうべは宵よいから容子いきづかが変なので行李の産所へ入れ
 るとは直ぐ飛出して息遣いきづかいも苦しうに※々《ニヤニヤ》啼なき
 ながら頻りと身体からだをこすりつけて変な容子をする。爰ここで産落うみおとさ

れては大変と、強^{むり}に行李へ入れて押え付けつつ静かに背中から腰^{さす}を撫^{さす}つてやると、快^いい氣持^{きもち}そうに漸^{やっ}と落付いて、暫らくしてから一匹産落し、とうとう払^{あけがた}曉まで掛^かつて九匹を取上げた^とと、猫のお産の話^{はなし}を事細やかに説明して、「お産の取^{とり}上^{あげ}爺^{じい}となつたのは弁慶と僕^{わが}だけだろう。が、卿^{きやう}の君よりは猫の方がよ^{えら}っぽど豪^{えら}かつた、」と手^て柄^{がら}顔^{がお}をした。それから以来習慣^{しやうはん}が付^つき、子を産^うむ度^{たんび}毎^{まい}に必ず助産のお役^{やく}を勤^こめ、「犬猫の産科病院が出来ればさしずめ院長になれる経歴^{けいれき}が出来た、」と大得意^{だいとくい}だつた。

不思議な事にはこれほど大切に可愛^{あい}がつていたが、この猫には名^ながなかつた。家^{うち}族^{もの}は便宜上「白」と呼^よんでいたが、二葉亭は決して名を呼^よばなかつた。「名なんかドウでも好^すい、なくても

好い、猫に名なんか付けるのは人間の繁文縟礼はんぶんじよくれいで、猫は名を呼ばれたって決して喜ばない、」といていた。こんな処にも空名虚譽を喜ばない二葉亭の面目が現れていた。

最一つ不思議な事は、この位に猫や犬を可愛がつていても、ツイぞ一度人から貰った事がない。「棄てられたり紛れまぐたりして来たから拾って育ててやるので、犬や猫を飼うのは楽たのしみよりは苦くるしみである。わざわざ求めて飼うもんじや決してない、」といていた。二葉亭の犬や猫に対するや人間の子を愛すると同じ心持であった。

六 二葉亭の文章癖

二葉亭は始終文章を気にしていた。文人が文章に気を揉むのは当然のようであるが、今日の偶像破壊時代の文人は過去の一切の文章型を無視して、同じ苦むくるしにしてもこれまでの文章論や美辞法からは全く離れて自由であるべきはずである。極端に言えば、思想さえ思う存分に発現する事が出来るなら方式や修辭は革命家の立場からはドウでも宜よかるべきはずである。二葉亭も一つの文章論としては随分思切った放胆な議論をしていたが、率いぎ自分が筆を執る段となると仮名遣いから手爾テニヲハ於波、漢字の正訛せいこ、熟語の撰択、若い文人が好い加減に創作した出鱈目でたらめの造語の詮索せんさくから句讀くとうの末までを一々精究して際限なく気にしていた。

二葉亭時代の人は大抵国漢文の秩序的教育を受けたから、国漢文の課題文章の習練にはかなり苦^{くる}まされて文学即文章の誤った考を吹込まれていた。当時の文章教育というのは古文の模倣であつて、山陽^{さんよう}が項羽本紀^{こううほんぎ}を数百遍反覆して一章一句^{ことごと}を尽く暗記したというような教訓が根深く頭に染^{しみこ}込んでいて、この根深い因襲を根本から剿^{そうぜつ}絶する事が容易でなかった。二葉亭も根が漢学育ちで魏叔子や壮悔堂を毎日繰返し、同じ心持で清少納言や鴨^{かも}長^{のちよう}明^{めい}を読み、馬琴や京伝三馬の俗文学までも究^{きわ}め、課題の文章を練習^{つもり}する意で近松や馬琴の真似をしたり、あるいは俗文を漢訳したり漢文を俗訳したりした癖が抜け切れないで、文章を気にする文章家氣質がいつまでも失^うせなかつた。一面には従来の文章型を

根本から破壊した革命家であつたが、同時に一面においてはまた極めて神経的な新らしいちようちゆう彫虫の技術家であつた。

自分は小説家でないとか文人になれないとかいつたには種々の複雑した意味があつたが、自ら文章の才がないと断念あきらめたのもまた有力なる理由の一つであつた。二葉亭の作を読んで文才を疑う者は恐らく決してなかうと思ふが、二葉亭自身は常に自己の文才を危あやぶんで神経的に文章を気に病んでいた。文章上の理想が余り高過ぎたというよりも昔の文章家氣質が失せなかつたので、始終文章に屈托していた。ツルゲーネフを愛読したのも文章であつて、晩年余りに感服しなくなつてからもなお修辞上の精妙を嘖さくさく々し、ドストエフスキーの『罪と罰』の如きは露国の最大文学であるを

確認しつつもなお、ドストエフスキーの文章はカラ下手へたくそで全まるで成っていないといってツルゲーネフの次位に置き、文学上の批判がともすれば文章の好悪に囚とらわれていた。例えば現時の文学に對しても、露伴を第一人者であると推しながらも、座右に置いたのは紅葉全集であつた。近松でも西鶴でも内的概念よりはヨリ多くデリケートな文章味を鑑賞して、この言葉の綾あやが面白いとかこの引掛けが巧みだとかいうような事を能く咄はなした。また紅葉の人生觀照や性格描写を凡近淺薄と貶けなしながらもその文章を古今に匹ひつちゆう

傳 なき名文であると激賞して常に反覆細読していた。最も驚くべきは『新声』とか何々文壇とかいうような青年寄書雑誌をすらわざわざ購読して、中学を卒業したかそこの無名の青年の文

章まで一々批点を加えたり評語を施こしたりして細つづさに味わった。丁度植物学者が路傍の雜草にまで興味を持つて精くわしく研究すると同一の態度であつた。

この点では私は全く反対であつた。私は自分が悪文家であるからでもあろうが、夙はやくから文章を輕けい蔑べつする極端なる非文章論を主張し、かつて紅葉から文壇の野獸視されて、君の文章論は狼おおかみの遠吠とおほえだののしと罵られた事があるくらい、文章上のアナーキストであつたから、文章論では二葉亭とも度々衝突して、内心ひそか竊に二葉亭の古い文章家氣質を嫌あきたらなく思つていた。が、自分のような鈍感者では到底味あじわう事の出来ない文章上の微妙な説を聞いて大いに発明した事もしばしばあつたし、洗練推すいこう敲肉瘦やせるまでも反覆塗と

竄^{さん}何十遍するも決して飽きなかつた大苦辛を見て衷心嘆服せずにはいられなかつた。歿^{ぼつご}後遺文を整理して偶然初度の原稿を検するに及んで、世間に発表した既成の製作と最始の書き卸しと文章の調子や匂いや味^{あじわ}いがまるで別人であるように違つてゐるのを発見し、二葉亭の五分も隙^{すき}がない一字の増減をすら許さない完璧^{かんぺき}の文章は全く千鍛万錬の結果に外ならないのを知つて、二葉亭の文章に対する苦辛感嘆をいよいよ益々深くした。

七 田端の月夜

三十六年、支那から帰朝すると間もなく脳貧血症を憂いて暫ら

く田端^{たばた}に静養していた。病氣見舞を兼ねて久しぶりで尋ねると、思つたほどに衰^{やつ}れてもいなかったの、半日を閑談して夜るの九時頃となつた。暇^{いとまご}乞^いいして帰ろうとすると、停^{ステーション}車場まで送ろうといつて、たつた二、三丁であるが限^{くま}なく霽^はれた月の晩をブラブラ同行した。

満月ではなかつたが、一点の曇りもない冴^さえた月夜で、丘の上から遠く望むと、見渡^{はて}す果もなく一面に銀^{ぎん}泥^{でい}を刷^はいたように白い光で包まれた得^えもいられない絶景であつた。丁度秋の中頃の寒くも暑くもない快^{こころよ}い晩で、余り景色が好いので二人は我知らず暫らく佇^{たちどま}立^{あたり}つて四^あ辺^{たり}を眺めていた。二葉亭^{たちま}は忽^{そこち}ち^{から}底^{そこち}力^{ちから}のある声で「明月や……」と叫^{うな}つて、較^やや暫らく考えた後、「……跡^{あと}が

出ない。が、爰こゝで名句が浮んで来るようでは文人の縁が切れない。絶句する処が頼もしいので、この塩梅あんばいではマダ実業家の脈がある、」と呵然かぜんとして笑った。

汽車の時間を計って出たにかかわらず、月に浮かれて余りブラブラしていたので、停車場ステーションでベルが鳴った。周章あわてて急坂を駈か下りて転ころがるように停車場に飛込みざま切符を買った処へ、終列車が地響き打って突進やっして来た。ブリッジを渡る暇もないのでレールを踏越えて、漸やっとこさと乗込んでから顔を出すと、跡から追駈さけて来た二葉亭は柵さくの外に立って、例の錆さびのある太い声で、

「芭蕉ばしやうさまのお連れで危ない処だった」といった。その途端に列車は動き出し、窓からサヨナラを交換したが、狭い路を辿たどって

帰る淋しい背うしろかげ影が月明りに霞かすんで見えた。二葉亭の健康の衰え初めたのはその頃からであつた。

八 対島沖の大海戦の二日後

最も元氣だつたのは日露戦争中であつた。大阪朝日の待遇には余り平らかでなかったが、東京の編輯局には毎日あるいは隔日に
出掛けて、海外電報や戦地の通信を瞬時も早く読むのをたのししみとしていた。

「砲声聞ゆ」という電報が朝の新聞に見え、いよいよ海戦が初まつたとか、あるいはこれから初まるとかいう風説が世間を騒がし

た日の正午少し過ぎ、飄ひよつこり然ぜんやって来て、玄関から大きな声で、

「とうとうやったよ！」と叫どなった。

「やったか？」と私も奥から飛んで出で、「結果は？」

「マダ十分解らんが、勝利は確実だ。五隻か六隻は沈めたろう。

電報は来ているが、海軍省が伏せてるから号外を出せないんだ、」

とさも大本營か海軍省の幕僚ばくりようでもあるような得意な顔をして、

「昨夜はマンジリともしなかった。今朝けさも早くから飛出して今ま

で社に詰めていた。結局はマダ解らんが、電報が来る度毎たんびに勝利

の獲物が次第に殖ふえるから愉快で堪たまらん。社では小使給仕までが

有頂うちようてん天だ。号外が最う刷れてるんだが、海軍省が沈黙している

から出す事が出来んで焦じり焦りしている。尤も今日は多分夕方ま

では発表するだろうと思うが、近所まで用達しに来たから内ないな

いそつも
々密と洩らしに来た。」

と、いつも沈着おちつしてる男が、跡から跡からと籠こみあげ上る嬉しさを包

み切れないように満面にこにこを莞爾々々さして、「何十年来の溜りゆういん飲

が一時に下さがつた。赤錆あかさびだらけの牡蠣殻かきがらだらけのボロ船が少しも

恐ろしい事アないが、それでも逃がして浦塩ウラジオへ追い込めると士

気に関係する。これで先ず一段落が着いた。詳細は解らんが、何

でもよっぽど旨く行ったらしい……」とちよつと考えて「事に由

るとロスの奴、滅茶々々めちやめちやかも解らん。今日の電報が楽たのしみだ。」

といいつつソソクサして、「こうしちやおられん。これから復また

社へ行く、」と茶も飲まないで直ぐ飛出し、「大勝利だ、今度こ

そロスの息の根を留めた、下戸げこもシャンパンを祝うべしだネ！」
と周章あたふた格子を排あけて、待たせて置いた車に飛乗りざま、「急げ、
急げ！」

こんな周章あわただしい忙がしい面会は前後に二度となかった。

「ロスの奴滅茶々かも解らん」とあたかも軍令部長か参謀総長
でもあるかのようなプライドが満面みなぎに漲みっていた。恐らくこの歡
喜を一人で味あじわつてられないで、周章てて飛んで来たのであろう。

九 二葉亭の破壊力

二葉亭に親近した或る男はいった。「二葉亭は破壊者であつて、

人の思想や信仰を滅茶々に破壊するが、破壊したばかりでこれに代るの何物をも与えてくれない」と。思想や信仰は自ら作るもので人から与えるべきものでないから、求めるものの方が間違つてゐるが、左とに右かく二葉亭は八門遁とんこう甲こうというような何処どこから切込んでも切崩きりくずす事の出来ない論陣を張つて、時々奇兵を放つては対手あいてを焦じらしたり悩ましたりする擒きん縦しやう殺活自在の思弁すこぶに頗る長じていた。

勿論、演壇または青天井の下で山犬のように吠立ほえたつて憲政擁護を叫ぶ熱弁もし、若くは建板たていたに水を流すようにあるいは油紙に火を点つけたようにペラペラ喋しゃべり立てる達弁ではなかつたが、丁度甲州流の戦法のように隙間すきまなく槍やりの穂尖ほさきを揃そろえてジリジリと平押ひらおし

に押寄せるといふような論鋒ろんぼうは頗る目鮮めざましかつた。加うるに肺腑を突き皮肉に入るの氣鋒極めて鋭どく、一々の言葉に鉄槌てつづいのような力があつて、触るる処の何物をも粉碎せずには置かなかつた。二葉亭に接近してこの鋭ぼんきんどい万鈞ばんきんの重さのある鉄槌に思想や信仰を粉碎されて、茫乎ぼうことして行く処を喪うしなつたものは決して一人や二人でなかつたろう。

それがしの小説家が俄にわかに作才を鈍らして一時筆を絶つてしまつたのも二葉亭の鉄槌を受けたためであつた。それがしの天才が思想の昏迷こんめいを来きたして一時あらぬ狂名を歌われたのもまた二葉亭の鉄槌に虐しいたげられた結果であつた。二葉亭に親近するものの多くは鉄槌の洗礼を受けて、精神的に路頭に迷うの浮浪人たらざるを得

なかった。中には靈の飢餓を訴うるものがあつても、靈の空腹を充たすの糧かてを与えられないで、かえつて空腹を鉄槌なぶの弄り物にされた。

二葉亭の窮理の鉄槌は啻ただに他人の思想や信仰を破壊するのみならず自分の思想や信仰や計画や目的までも間斷しつきりなしに破壊していた。で、破壊しては新たに建直し、建直しては復た破壊し丁度児供こどもが積木つみきを翫もてあそぶように一生を建てたり破こわしたりするに終った。

二葉亭は常にいった。フィロソフィーというは何処までも疑問を追究する論理であつて、もし最後の疑問を決定してしまつたならそれはドグマであつてフィロソフィーでなくなつてしまふと。また曰く、人生の興味は不可解である、この不可解に或る一定の

解釈を与えて容易に安住するは「あきらめ」でなければイグノランスである。かくの如くして二葉亭の鉄槌は軽便安直なドグマや「あきらめ」やイグノランスを破壊すべく常に揮ふるわれたのである。

十 二葉亭の風丰人品

誰やらが二葉亭を評して山本権兵衛ごんべえを小説家にしたような男だといった。海軍問題以来山本伯の相場は大分下落し、漸ようやく復活して頭を擡もちあ上げ掛けると、忽たちまち復た地震のためにピシャンコとなつてしまったから、文壇の山本伯というは苔こけの下こけの二葉亭も余りあ

りがたくないだろうが、風^{ふう} 丰^{ぽう}が何処^{どこ}か似通^{にかよ}っている。山本権兵衛と見立てたのは必ずしも不適評ではない。

が、骨相学や人相術が真理なら、風丰の似通っている二人は性格の上にもドコかに共通点がありそうなもんだが、事實は性格が全く相反対していた。二葉亭にもし山本伯の性格の一割でもあつたら、アンナにヤキモキ悶^{もだ}えたり焦^{いら}々^{いら}したりして神経衰弱などに罹^{かか}らなかつたろう。社会的にも最少^{もすこ}し成功したろう。が、気の毒^{かな}なる哉二葉亭は山本伯とは全く正反對に余りに内氣^{シヤイ}であつた、余りに謙遜であつた、かつ余りに潔癖であつた。切^せめて山本伯の九^{きゅう}牛^{ぎゅう} 一^{いち}毛^{もう}なりとも功名心があり、粘着力があり、利慾心があり、かつその上に今少し鉄面皮^{てつめんぴ}であつたなら、恐らく二葉亭

は二葉亭四迷だけで一生を終らなかつたであらう。

が、方領粗髯の山本権兵衛然たる魁偉かゐいの状貌は文人を青瓢あおびょうた

筆んの生なまつちら白なまけた柔弱男にやけおとこのシノニムのように思う人たちをし

て意外の感あらしめた。二葉亭の歿後知人は皆申合わしたように二葉亭の風丰がいわゆる小説家型でなかつた初対面の意外な印象を語つておる。その上に重厚沈毅な風丰に加えて、双眉の間に深い縦の皺しわを刻みつつ緊きつと結んだ口から考え考えポツリポツリと重苦しく語る応対ぶりは一見信頼するに足る人物と思わせずには置かなかつた。かつ対談数刻に涉わたつてもかかつて倦けん色しよくを示した事がなく、如何なる人に対しても少しも城府じょうふを設けないで、己おのれの赤心せきしんを他人の腹中に置くというような話しぶりは益々ますます人を

して心服せしめずには置かなかつた。

二葉亭を何といつたら宜よかろう。小説家型というものを強あながち青瓢箪的のヒヨロヒヨロ男と限らないでも二葉亭は小説家型ではなかつた。文人風の洒脱しゃだつな風流氣けも通人つうじん氣取きどりの嫌味いやみな肌合はだあいもなかつた。が、同時に政治家型の辺幅へんぷくや衒氣げんきや倨傲きようごうやニコポンは藥にしたくもなかつた。君子とすると霸氣はきがあり過ぎた。豪傑とすると神經過敏であつた。實際家とするには理想が勝ち過ぎていた。道学先生とするには世間が解り過ぎていた。ツマリ二葉亭の風格は小説家とも政治家とも君子とも豪傑とも實際家とも道学先生とも何とも定められなかつた。

社交的応酬は余り上手でなかつたが、慇懃謙遜いんぎんけんそんな言葉に誠意

が滔^{あふ}れて人を心服さした。弁舌は下手でも上手でもなかったが話術に長じていて、何でもない世^せ間^{けん}咄^{ばなし}をも面白^{あじわ}く味^{あじ}わせた。殊に小説の梗^{こう}概^{がい}でも語らせると、多少の身振^{みぶり}声^{こわ}色^{いろ}を交えて人物を眼前^{めのみえ}に躍^{おど}出^りさせるほど頗る巧みを究めた。二葉亭が人を心服さしたのは半ばこの巧妙なる座談の力があつた。

二葉亭は極めて謙遜であつた。が、同時に頗る負け嫌いであつた。遠慮のない親友同士の間では人が右といえれば必ず左というのが常癖で、結局同じ結論に達した場合「むむ、そうか、それなら同説だ、」といったもんだ。初めから同じ結論に達するのが解つていても故意に反対に立つ事が決して珍らしくなかつた。かつこの反対の側から同じ結論に達する議論を組立てる手際^{てぎわ}が頗る鮮^{あざ}か

であつた。

負け嫌いの甚だしいは、人に自分の腹を看透かされたと思うと一端決心した事でも直ぐ撤去して少しも未練を残さなかつた。かつて二葉亭の一身上の或る重要な問題について坪内博士と談合した時、二葉亭の心の中は多分こうであらうと推断して博士に話した。すると間もなく二葉亭は博士を訪うて、果して私が憶測した通りな心持を打明けて相談したので、「内田君も今来て君の心持は多分そうであらうと話した」と、坪内博士が一と言いうと直ぐ一転して「そんな事も考えたが実は猶だ決定したのではない」と打消し、そこそこに博士の家を辞するや否、直ぐその足で私の許を訪い、「今、坪内君から聞いて来たが、君はこうこういったそ

うだ。飛んでもない誤解で、毛頭僕はそんな事を考えた事はない、
」と弁明した。復た例の癖が初まったナと思いつつも、二葉亭
の權威を傷つけないように婉曲に言い廻し、僕の推察は誤解
であるとしても、そうした方が君のための幸福ではない乎と意中
の計画通りを実行させようとした。が、口を酸くして何と説得し
ても「ソな考は毛頭ない、」とばかり主張つて、相談はとうと
うそれきりとなつてしまった。現在自分の口から言出して置きな
がら、人に看透かされたと思うと直ぐコロリと一転下して、一端
口外した自家意中の計画をさえも容易に放擲して少しも惜まな
かつたのはちよつと類の少ない負け嫌いであつた。こういう旋
毛曲りの「アマノジャク」は始終であつて、一々記憶していな

いほど珍らしくなかった。

二葉亭はこういう人物であつた。小説家であつて一向小説家らしくなかった人、政治家を志ざしながら少しも政治家らしくなかった人、実業家を希望しながら企業心に乏しく金の欲望に淡泊な人、謙遜なくせに頗る負け嫌いであつた人、ドグマが嫌いなくせに頑固に独断に執着した人、更に最^もう一つ加えると極めて常識に富んだ非常識な人——こういう矛盾だらけな性格破産者であつて、この矛盾のために竟^つに一生を破壊に終つた人であつた。

二葉亭の古い日記から二節を引いて以て二葉亭の面影と性格とを偲^{しの}ぶの料としよう。

「この世を棄てんとおもひたる人にあらねばこの世の眞の価値は知るべからず。」

「氣の鬱したる時は外出せば少しは紛るる事もあるべしと思へどもわざと引籠りて求めて煩悶するがかへつて心地よきやうにも覺ゆ。」

（大正四年八月稿、同大正十三年十月補筆）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「きのふけふ」

1916（大正5）年3月5日

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二葉亭余談

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>